古今和歌集

古今和歌集・・・平安時代初期
技巧的で、繊細優美な歌が多い

人はいさ 心も知らず ふるさとは 花ぞ昔の 香(か)ににほひける

紀貫之(きのつらゆき)

人の心はさあどう変わってしまったかわかりません。しかし昔からの懐かしい土地では花が昔のままに香っていることです。

ポイント　ぞ→ける→係り結び　句切れ→二句切れ

かわりやすい人の心とふるさとの花を対比させている歌

秋来(き)ぬと 目にはさやかに 見えねども 風の音にぞ おどろかれぬる

藤原敏行(ふぢはらのとしゆき)

秋が来たと目にはっきりと見えるものではないが風の音にはっと気づかされたことがあるよ。

ポイント　さやかに→はっきりと　句切れ→句切れなし

秋の訪れを風によって気づかされるという歌

思ひつつ寝(ぬ)ればや人の見えつらむ 夢と知りせば覚めざらましを

小野小町(をののこまち)

恋しく思い続けながら寝たのであの方があらわれたのでしょうか?夢とわかっていたなら覚めないでいたでしょうに。

ポイント　や→らむ→係り結び　句切れ→三句切れ

好きな人が夢に出てきた。夢がさめてがっかりした様子をよんだ歌